# 令和5年度 現職研修助成事業 報告

本校の研究主題

**学ぶ楽しさや喜びを実感できる小中一貫教育カリキュラムの工夫**
**～英語、外国語、外国語活動を軸にして～**

本校は平成21年度に英語教育について文部科学省の研究を受け、平成22・23年度に外国語活動、英語科を軸とする研究開発校となった。また、平成24年度から29年度にかけて教育課程特例校に指定されたことを契機に、「小学校1年生からの外国語活動 特色ある教育課程の編成」を研究の中心に据えて教育活動を展開しており、平成27年度からは、小学校1年生から中学校3年生までの9年間を見通した「グローバルコミュニケーション科」を教育課程の中に位置づけ、実践を行っている。

今年度も、小中9年間を見通した英語、外国語、外国語活動を中心としたカリキュラムマネジメントを本校研究の柱の1つに据えており、小中学校間のスムーズな連携についても研究を重ねることで、主体的に学び続ける児童生徒を育成したいと考えている。

研修を推進するため、山口県教育会から助成を受け、先進校視察を実施したので、その概要を報告する。

先進校視察報告

防府市立富海小中学校　山根 由佳

1 研修期日　　令和6年2月2日（金）、3日（土）
2 研修先　　第19階全国小学校英語教育実践研究会 熊本大会
3 研修の目的　　小学校における英語教育の先進校を視察することで、今年度以降本校で実施する研修の活性化を図る。
4 内容
（1） 令和６年２月２日(金) 公開授業・事後研究会 熊本市立出水南小学校
　① ６ 年 1 組 横手教諭（英語教育専科） 単元名「Junior High School Life」

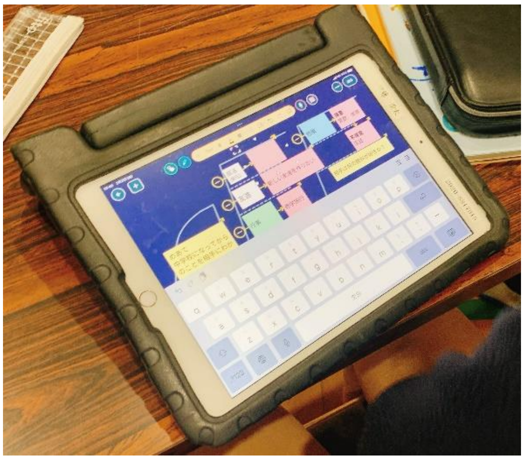
本時のめあては、「話を続けるために、工夫しよう。」であった。横手教諭が英語教育専科で複数の学校を兼務しているということもあり、単元のゴールとして、小学校卒業後、同じ中学校区となる小学校の6年生と英語で zoom 交流をし、仲を深めるということを掲げていた。コミュニケーションの目的を明確にすることで子ども達の学習への意欲が高まり、活動にも真剣に取り組んでいた。

横手教諭は、1時間を通して、スクリーン投影、ロイロノート（内容メモ・振り返り）、動画撮影など ICT を多く活用していた。特にロイロノートでは、シンキングツールのフィッシュボーンを用いて、交流の際に相手と話してみたい題材を多くメモしていた。子ども達も、話が止まってしまった時にメモを確認して話を繋げていたため、安心材料となっていたようだ。

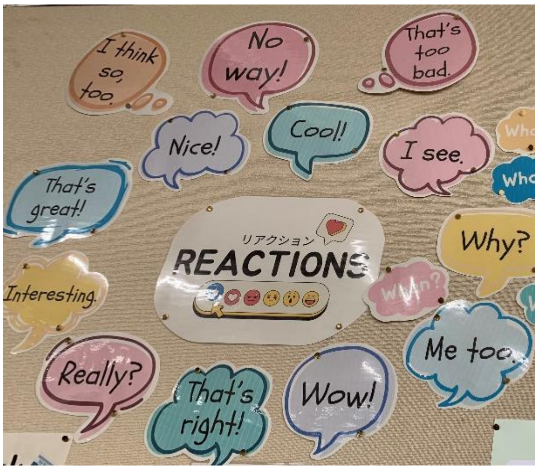
他にも、毎時間の最後にペアやグループでのやりとりの様子を動画で記録として残しており、それを見返す機会を設けている。少しずつコミュニケーションスキルが向上していることを実感できることが、英語学習のモチベーション維持に効果的であると感じた。

また、コミュニケーションを一方的に伝えるだけではなく、聞き手としての態度もきめ細かに指導をしており、その継続的な指導により、相手の話を聞いているときの反応は大変良かった。簡単な Nice!や Good!などのリアクションだけでなく、Oh, You like~.といった繰り返しや、Do you like~?や Why?といった問い返しも多くみられた。相手がきちんと自分の英語を受け止めてくれることに喜びを感じ、生き生きとした表情でコミュニケーションを楽しむ様子が印象的であった。

ロイロノートのシンキングツール



外国語ルームにおける掲示




② 5 年 4 組 伊藤教諭（学級担任） 単元名「My here is my brother」

本時のめあては、「もっとあこがれの人のことが分かるようにするためには、どうすればいいか。」であった。あこがれの人といえば、芸能人やアスリートの名前を挙げそうになるが、それでは関係が遠すぎて漠然としか知らない部分が大きい。今回伊藤教諭が重点を置いたのは、「詳しく伝える」ということだった。そのため、人物設定の段階から意識的に、自分事として語れるほど身近な家族や友人などを選択させていた。

子ども達は、ペアでの発表練習をしながら、もっと知りたいことを伝え合い、内容に磨きをかけていた。さらに、学級全体においても、児童が発表した内容をよりよくするにはどうすれば良

いのかについて活発に意見を出し合い、学級のみんなで学び合っていた。

　また、子ども達の中から、「ピアノが上手な友達に憧れているのは、自分もピアノを習っていて、その子のように上手に演奏できるようになりたいからで、そのことも言いたい。」という意見が出てきた。相手の事を詳しく伝えるだけではなく、同時に自分自身の情報も伝えたいという言語活動に大切な思考が子ども達の中から自然に発生していることに驚きを感じた。それだけではなく、その後のやりとりを観察していると、“She can play the piano well. I like piano. Do you like piano?”と、ペアの児童に質問をするところまで繋げていた。その児童だけではなく、多くの児童がコミュニケーションを臆せずに楽しむ様子から、普段から英語でコミュニケーションをとる機会が多く、場慣れしていることや、失敗を恐れずにチャレンジできる学級風土があることを感じた。

学級全体で学び合う様子

板書

（2）　令和６年２月３日(土)　全体会・講演会・分科会　熊本城ホール

【テーマ】 言語活動の充実を目指した授業作りについて

指導助言　直山　木綿子　氏（文部科学省初等中等教育局視学官）

　直山視学官からは、主に、言語活動についての詳しい定義や活動の設定方法などの説明があった。まず言語活動とは、「実際に英語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合う」活動を意味する。そして、言語活動を行う際は、コミュニケーションを行う目的・場面・状況などを教員が明確に設定し、児童もそれを意識していることが大切である。

　しかし、毎回の授業で大それた言語活動を設定し準備するのは、他教科等も指導している小学校教員にとって大変な作業となる。そこで、言語活動を設定するにあたり、大分県佐伯市

の明治小学校と上堅田小学校で実践している4つのポイントの紹介があった。①「必然性」②「相手意識」③「ほんもの」④「コミュニケーションの楽しさや意義」の4つである。何か言語活動を設定する際は、活動の大小に関わらず、これらのポイントを掴んでいるかどうかを確認することで、言語活動の設定がしやすくなるようだ。

他にも、減点主義からの脱却が必要であるというお話があった。教員も子ども達も英語学習を難しく考えるあまり、言語活動で簡単なやりとりができていたとしても、「この調子で学習していけば、いつか英語を話せるようになる。」と考えがちである。そうではなく、設定された言語活動で他者とのコミュニケーションが図れていれば、それはすでに「英語が話せている」状態である。教員と児童の両者がそれを自覚することで、学習者が英語を純粋に楽しめるようになったり、学習意欲が高まったりするという。

このことに関して、中学校のものではあるが興味深いデータがあった。「教員は言語活動を取り入れていると思っていても、生徒は言語活動をしている自覚がほとんどない」というものだ。これでは、学習者自身が英語を話せているという実感を得られにくい。その差を縮めるためにも、振り返りが大切である。言語面・内容面で自らの学習のまとめと振り返りを行うことで、子ども達自身が学んだことの意味づけを行ったり、新たに得られた知識をその後のコミュニケーションに活用したりできるようになるようだ。

## 5 おわりに

本研修会を通して、学ぶ楽しさや喜びを実感できる授業をするためには、子ども達の学び合いの場を大切にすることが重要であると感じた。まずは、教員が言語活動を多く仕組み、子ども同士のやりとりの機会を増やしていくこと。そして、言語活動においても、ただやりとりをするのではなく、互いにリアクションを大切にし、相手が自分の英語を受け入れてくれているという喜びを味わうこと。また、コミュニケーションにおいて表現の仕方が分からなければ、クラス全体で立ち止まって、皆で真剣に考えることなど。これらの学び合いを通して、子ども達は着実に力を身につけていくのだと学んだ。

英語学習に限った話ではないが、これらの学び合いをするためには、間違うことを受け入れられる、お互いを認め合える学級集団作りが欠かせない。外国語活動・外国語科の指導者として、日頃から、より良い学級集団作りを土台に、「英語を学ぶことが楽しい」と思える授業を目指していきたい。